

# 「日本の元気印～商店街復活物語～」

## (1) はじめに

現在我が国の商店街を取り巻く環境は、低迷している個人消費や規制緩和に伴う大型店の積極的な出店、また小売り業態間競争の激化等により、極めて厳しい環境にあるといえるだろう。まさに日本の商店街は存亡の危機に陥っている。果たしてこのまま商店街が無くなっても日本の社会はいいのだろうか。私の答えはノーである。これからの日本は少子高齢化社会になることは明白である。少子高齢化時代に突入しても、日本が元気を維持したいのならなおさらである。

## (2) 現況

今の日本の買い物環境は車が必需品であることは間違いない。車で郊外にある大規模小売店に買い物に行くのが、今の日本の主流になっている。この買い物環境は、少子高齢化時代にはとても適応しきれない。高齢者が車を運転し、郊外の大規模小売店に行くより、地域の商店街で車を使わずに買い物できるほうが少子高齢化時代には適正であると思う。そのような意味においても地域の商店街はとても大切であり、このままの環境ではいけないと思う。

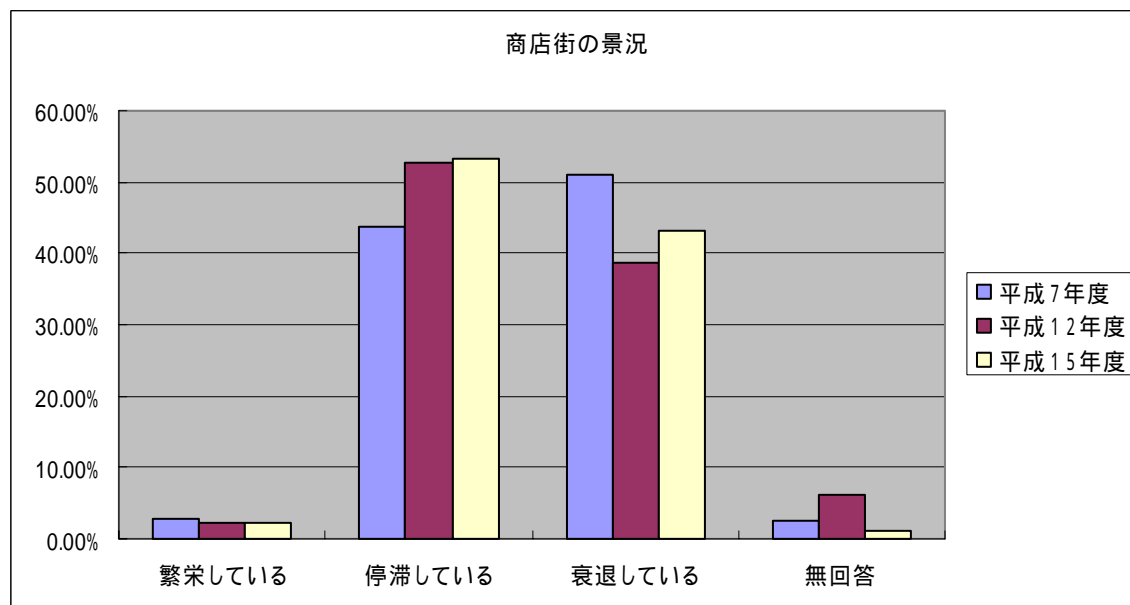


図1 - 中小企業庁：平成15年度商店街実態調査

図1は平成7年度、平成12年度、平成15年度の商店街の景況を示している。図1から商店街は「停滞している」、「衰退している」を合計すると、各年度とも90%を超えることが分かる。これは平成7年度から平成15年度の8年間の間で、商店街を取り巻く環境が改善されず、相変わらず極めて厳しい環境にあることを意味している。しかしデータ上では、「停滞している」は平成7年から平成15年度にかけて増加していて、「衰退している」は同期間で減少していることから、やや持ち直しの動きがみられる。が、以前厳しい状況にあることは変わらない。

なぜ商店街はこんなにも停滞、衰退しているのか。

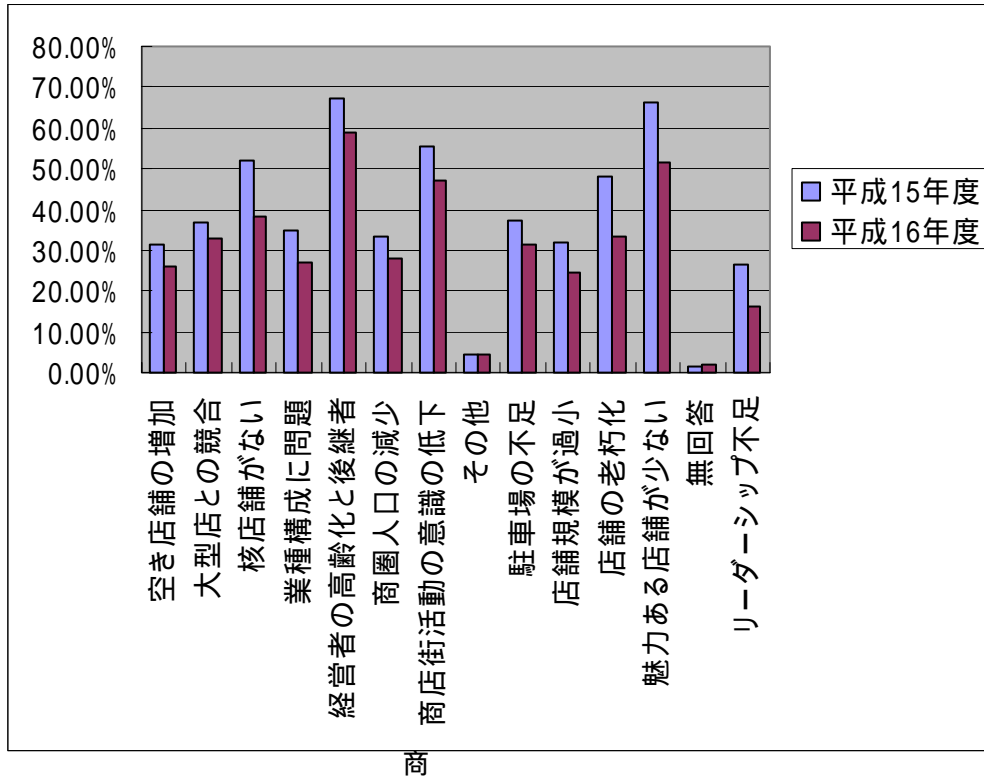


図2 中小企業庁：平成15年度商店街実態調査

図2は商店街の衰退及び停滞の要因を調査したものである。平成15年度、平成16年度で一番高い要因は「経営者の高齢化と後継者問題」であった。これは、時代の変化に対応出来なかった経営者にとって代わる人材がないということである。商店街がにぎやかだった時代は、今ほどモータリゼーションは発達しておらず、大規模小売店も数は少なかった。その当時の買い物行動といえば、近隣の商店街で買い物を済ますというのが一般的であった。そのような環境の下で商店街は繁栄してきた。しかし、現在は昔と比べることができないくらいモータリゼーションが発達し、また、バブル崩壊により土地価格が下落、金利の低下、政府による大規模小売店の規制緩和等により、商店街を取り巻く環境は一変した。都市の郊外に大規模小売店が多く進出し、消費者は商店街より大規模小売店へと足を向けた。そのような圧倒的商店街不利の環境下では、後継者が現れないのは明白である。将来への希望が見えないのである。

### (3) 希望

ならばどうすればいいのか。私はもう一度商店街の社会的役割を見直すことが必要だと思う。これからの日本社会は少子高齢化社会である。前にも述べたように少子高齢化時代に大規模小売店舗の果たす社会的役割は現在より格段に低下するはずである。少子高齢化時代には、車を使わずに身近で買い物を済ますことが出来る商店街こそ必要不可欠な存在になるはずである。最近、政府はようやく重い腰をあげて大規模小売店の自由な出店に規制を加え始めた。時代は常に変化していく。商店街は独自性を活かし、時代の波に飲み込まれることなく常に進化していかなければならない。この荒波を乗り越えたとき、日本の商店街は輝きを取り戻すはずだ。